

## 研究ノート : NHK「みんなのうた特集(1962年)」に関する考察 : 再現演奏会にみる児童番組の教育的な意義

佐藤, 慶治  
鹿児島女子短期大学 : 専任講師

塚本, 江里子  
ソプラノ歌手

<https://doi.org/10.15017/4776883>

---

出版情報 : 総合文化学論輯. 15, pp.113-119, 2021-11-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン :

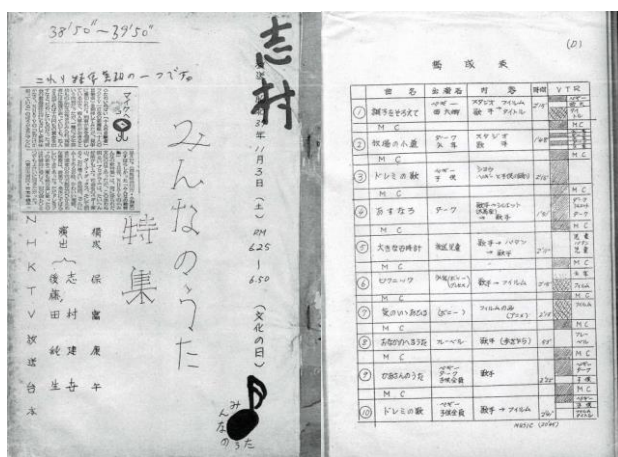
権利関係 : Copyright (C) 総合文化学研究所 all rights reserved. この論輯の全ての文章・画像の権利は、総合文化学研究所に属します。無断での使用・転載を禁止いたします。

# 研究ノート：NHK「みんなのうた特集(1962年)」に関する考察 —再現演奏会にみる児童番組の教育的な意義—

佐藤 慶治, 塚本 江里子

## 1. 本研究ノートの目的と再現演奏会について(佐藤執筆)

本研究ノートにおいては、2021年5月3日に千葉市若葉文化ホールにて、『みんなのうた』特別番組の台本を使用したソロと合唱によるコンサート」と題して開催された演奏会(以下、再現演奏会)をテーマとし、①演奏会開催の意図と背景、②演奏会開催から見えた児童番組の教育的な意義について論じる。この「みんなのうた」特別番組というのは、1962年11月3日の文化の日、午後6時25分から25分間の枠でNHKにおいて生放送された<sup>1)</sup>、「みんなのうた特集」である。「みんなのうた」放送開始から1年半が経過したということで、当時、人気のあった楽曲を集め、「みんなのうた」最初のチーフ・プロデューサーである後藤田純生と同番組ディレクターの志村建世の演出、台本作家の保富康午の台本で番組構成が行われた。出演は、司会・大人の女性歌手役であるペギー葉山と男性アンサンブルのダーク・ダックスの他、複数の児童合唱団が参加していた(図1)。



(図1、「みんなのうた特集」の台本より)

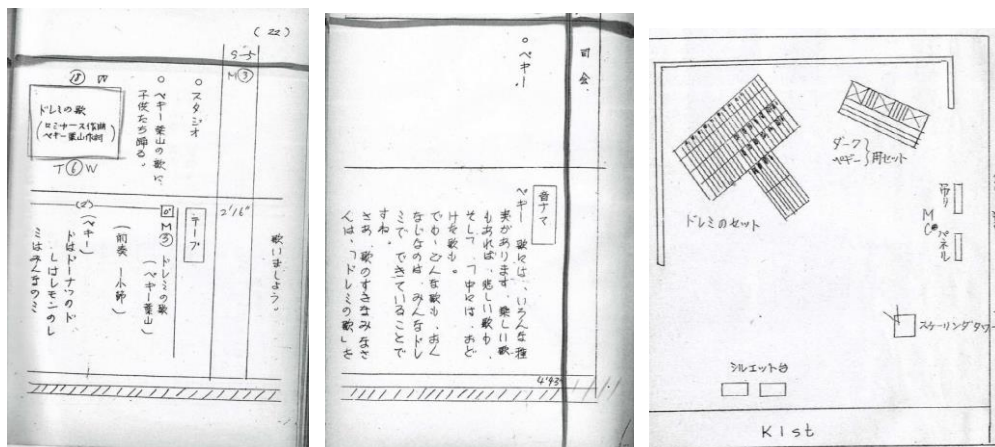
今回の再現演奏会においては、司会・女性歌手役に「ポンキッキーズ」でうたのおねえさんを務めた経験のある塚本江里子、男性アンサンブル役に二期会の前川健生(テノール)・堺裕馬(バリトン)、児童合唱役に千葉ソナク少年少女合唱団を当て、当時の台本より読み取れる①セリフ等構成②曲目③舞台セット④演出という4点についての学術的な再現を、科学研究費「NHK『みんなのうた』を中心とした日本児童音楽文化の変遷に関する歴史社会学的研究」(若手研究、課題番号18K13115、研究代表者:佐藤慶治)補助事業の枠内で行った。こ

の再現演奏会開催においては、楽曲・台本等の全ての著作権処理を行っており、また歌手役についても当時の出演歌手の実演家人格権等に抵触することのないよう配慮を行っている。曲目は、以下の9曲(うち1曲は2回演奏)である。

- 1 調子をそろえて 2 牧場の小道 3 ドレミの歌 4 あすなろ 5 大きな古時計  
6 ピクニック 7 気のいいアヒル 8 おなかのへるうた 9 母さんのうた 10 ドレミの歌

## 2. 再現演奏会開催の意図と背景について(佐藤執筆)

この再現演奏会を学術的な研究の枠内で開催した理由としては、当時の台本がそのまま残っていたということが一番にある。しかし、当時の「みんなのうた特集」の映像は、NHKにも保管されていない。この「みんなのうた特集」台本は、志村保管のものを複写し使用した。この台本には、セットの組み方や歌手、児童合唱団の動き、セリフ等の説明も詳細に記載されており(図2)、かなりの精度での再現が可能となった。



(図2、「みんなのうた特集」の台本より)

また、上記図にみられる「ドレミのセット」については、1962年6-7月に「みんなのうた」で放送された《ドレミのうた》映像のセットと同じものである。肖像権等の都合で本研究ノートには記載しないものの、後藤田の遺した資料内にセット写真が4枚保管されており、舞台制作の上での参考とした。この《ドレミのうた》についても、NHKで放送された映像は保管されておらず、歌手や児童合唱団の動き等については、志村から聞き取りを行った上で、「みんなのうた特集」台本からも読み取れる範囲で情報を得た。その上で、再現演奏会における動きについては、佐藤が演出を行っている。

そもそも「みんなのうた」は1961年4月に始まった5分間のミニ番組である。後藤田が

立ち上げに関わり、2 か月毎に数曲を入れ替える形式で、現在に至るまで放送が行われて来た。それが開始わずか1年半の後に、これだけの規模の特集を組まれるということは、当時における同番組の大変な人気を裏付けている。本再現演奏会では、その点を視覚的に体感するという点を第一の目的とし、開催を行った(図3)<sup>2</sup>。



(図3、再現演奏会より)

この「みんなのうた特集」では、女性歌手が司会の役を兼ねており、児童合唱団との会話等も含めたセリフ調の台本によって、場面が進行していく。例えば、《おなかのへるうた》と《かあさんのうた》の間のセリフは以下のとおりである。

ゆかいな歌ですね。でも、あんまりおなかへったへったなんて言って、お母さんを困らせてはいけませんよ。お母さんってどんなに大変か……。それは、お母さんとはなれてみて初めてわかることが多いんです。いいえ、お説教はしませんよ。でもね、《かあさんのうた》をききながら、そっとお母さんの手を見てごらんください。その手が、毎日みなさんのためにどれだけ働いてくれているか……。きっとそれがわかりますよ。

各曲間でこのようなセリフが主に女性歌手役によって言われるが、当時の世相を反映した「教育的」な内容のセリフが多い。次の章では、本再現演奏会で司会・女性歌手役を務めた塚本による、本再現演奏会開催から見えた児童番組の教育的な意義の考察を掲載する。

### 3. 司会・歌手役から見た「みんなのうた特別番組」の健全性(塚本執筆)

「みんなのうた」の持つ力

“公開シンポジウム「みんなのうた」1962年度特別番組：再現コンサート”を終えて、私はあたたかい爽快感に包まれた。稽古の段階から感じていたが、まるで音のタイムカプセルを開けたような、懐かしくてありがたい、そんな気持ちが込み上げて、改めて私に歌の持つ力は素晴らしいと思わせてくれたのであった。

このシンポジウムを観てくださった70代の男性は、「みんなのうた」の名曲に自分の人生を重ねながら、歌とともに蘇る思い出を噛み締めて涙してしまったそうだ。そして、なんとその曲は今、彼の孫が幼稚園で歌っているというのではないか。これこそが「みんなのうた」が60年の歩みでもたらした、日本の共通文化であり、「みんなのうた」最初のプロデューサーである故後藤田純生先生の願った“明るい健康な歌声の聴ける平和な情景”なのではないだろうか。「みんなのうた」はそんな歌い継がれる日本の歌を守ってきた番組なのだ。

音のタイムカプセルを開けて…

今回私は、女性歌手の役として歌と司会進行を務めたが、約60年前のうたのおねえさんに想いを馳せながら役作りをすることは、実に楽しい作業であった。衣装や髪型、立居振る舞いなど、当時を物語る資料は決して多くはない。参考資料は本企画の主催者である佐藤慶治氏から拝見させていただいた何枚かの写真のみであったが、澁刺とした笑顔や、きちんと整列しみんなが声を揃えて朗らかに歌う様子が写真から伝わってきた。さらなる情報を得るために、私はモデルとなった女性歌手の資料を探し、歌い方や当時の雰囲気をつい読み取るよう心がけた。子どもたちへの目線の送り方や、カメラを見るタイミング、カメラワークや全体の演出などを見ると、当時の撮影現場の様子を感じることができる。また「みんなのうた」放送と同時期の1960年代のラジオ番組や子ども向けのレコードなども、とても興味深く、役作りの再現性を高めるのに役立つ資料であった。この時代ならではの、少し古風な言葉のニュアンスはそのままに、できるだけ再現したいと思った。ハキハキとした挨拶から始まる丁寧な言葉遣い、会話の中の独特の間などは、その空間を健やかな安心感で包み込んでいる。おそらくこのような雰囲気は現代の子どもへの働きかけでは減りつつあるのではないだろうか。

このようにして、60年前の「みんなのうた」のイメージを肥やしていくうちにふと考えたことは、“どこまで再現するか”ということであった。当時の記録が十分でない以上、完全な再現は難しい。また、当時の表現をそのまま行うだけでは単なるモノマネになってしまう。大切なのは「みんなのうた」の精神を十分に理解した上で、今の世にも通じる健やかな言葉とはどのようなものが適切か、清廉さを失わない立居振る舞いはどのようなものであ

るべきか、など様々に考えることであると思う。それが再現性を高めて自分の中に落とし込むということだ。さらに、当時は番組開始から1年7ヶ月であったが、今は60年の歩みをのせているのだから、一層今に蘇らせるという面白さを感じて行うべきである。

当時の「みんなのうた」の再現性を高めながら、私らしく存在するために。そこで役に立ったのは、これまでの“うたのおねえさん”としての経験と、オペラの舞台で培ったクラシックの様式であった。

収録の場合はカメラへの呼びかけが多くなるが、そこだけにとらわれず舞台上で演じているような大きなスケールを意識した。また、最近の子ども番組ではダンスやキャッチーな動きなどエンタメ性を取り入れているように感じ、歌唱の仕方もより身近なポップス調の歌い方が多いように感じるが、今回は伸びやかな声楽歌唱に優しい童謡の柔らかい声音を使い分けることで、当時の健全性や抒情的な表現に迫る形とした。進行面での台本の言葉は出来るだけ忠実に、自分の言葉として話せるように抑揚などを工夫した。言葉が美しい当時の台本は今に置き換えても華やかさがある。話の切り替え時に「じゃ」と短い接続語のような言葉が入ったり、ドレミの歌の際に「幸せ」を「しやわせ」と歌って柔らかく移行させている部分などは特徴的だと感じたので、チャーミングに再現できるよう心がけた。

そして何より心に留めていたことは、あくまでも主役はテレビの前の子どもたちであり、これから始まる物語は、みんなで一緒に作り上げるもので、楽しい気持ちもワクワク感も共に分かち合おうという意識を持続させることであった。

“うたのおねえさん”とは…

「うたのおねえさん」は、とても不思議な役回りだ。歌が上手な優しいおねえさん、先生のお母さんのようで、一緒に遊んでくれる仲良しの友達。毎日同じ時間、テレビの中にいる、ちょっと不思議なおねえさんなのだ。私はそんなうたのおねえさんが大好きだった。最初に覚えたのは童謡の「あめふり」である。お気に入りの長靴を履けることが嬉しくて、いつも母とこの歌を歌いながら雨の日を待っていた。NHKの児童番組は、私の幸せな幼少期そのものである。その憧れを追い続け、今の私があるのだ。

音楽教育に携わるものとして大事にしていることは、自ら楽しんでクリエイティブな雰囲気を作り出すことだ。場を預かるものとして、安心安全なびのびとした器を作る。子ども目線に立ってアイコンタクトをし、「あなたはかけがえのない1人」なのだ、「あなたがいらないとはじまらないんだ」と伝える気持ちを持つことで、子どもは安心してここにいていいのだと感ずることが出来る。例えそれが収録スタジオだろうと、テレビの向こうにメッセージを届ける気持ちが必要であると感じている。

まとめ



うたのおねえさんとして教育番組の現場に携らせていただいたことをきっかけに、強く思うのは、子どもたちがのびのびと成長し、生き生きと感性を羽ばたかせる大切な幼少期を彩る児童番組を作っているのは、子どものためを思って、真剣に情熱を傾けている大人たちだということだ。当たり前のようにあるが、子どもの未来を思って、子どもの目線で数々のコンテンツを生み出してきた大人たちの心意気に、私はいつも感動する。そしてこの「みんなのうた」も、故後藤田純生先生をはじめとする製作陣の熱い願いと愛情が受け継がれて今に至るのだと思っている。

そして、これは運命の悪戯とでも言うべきか、本企画がコロナ禍においても実現されたことは、私たちが大いに勇気づけた。世界中が元気を無くし、晴れ晴れと歌うことが躊躇われる、そんな時代がやってくるとは思ってもよらなかった。音楽界をはじめ文化芸術に携わる私たちは無力さを痛感したそのような時期に、共に支え合って朗らかに歌が歌えたことをとても幸せに感じている。そしてこれからも「みんなのうた」が人々の心を輝かせてゆくであろうと信じている。

#### 4. おわりに(佐藤執筆)

以上、本研究ノートにおいては、「みんなのうた特集」の再現演奏会をテーマとし、①演奏会開催の意図と背景、②演奏会開催から見えた児童番組の教育的な意義について論じた。この再現演奏会については、『国民文化としての1960年代「みんなのうた」-NHK「みんなのうた」60周年に寄せて』と題した公開シンポジウムの一プログラムとして行ったものであるが、シンポジウムのテーゼである、1960年代の「みんなのうた」における国民文化的な側面を知る、ということについて視覚的な表象を行うことができたと考える。塚本氏の論考にもあるように、当時の「みんなのうた」を知る方々がこの再現演奏会を目にしてください、感想を寄せてくださったが、子ども時分の感覚がよみがえって、感動やなつかしさを覚えたという意見が非常に多かった。音楽やセリフ、視覚的な効果によって彩られた児童番組というのは、子どもの心に深く残り、その後の人格形成にまで影響を与えるものであるということが言えるだろう。

また、再現演奏会を行って感じたこととして、当時の子ども文化の健全さということがあつた。言葉遣いの丁寧さ、表情の明るさ、音楽の明朗さなど、現代においてはやや「おしつけがましい」などと評されてしまいそうな部分もあるが、子どもの健全な育成ということを考えたときに、ある一定の基準や規範というものは必ず必要になってくる。戦後民主主義下の日本では、戦前とは異なる規範が形成されてきたが、現在にもつながる子ども文化における基準というのは、「みんなのうた」黎明期当時の児童番組等を通じて涵養されてきたものであるということを強く感じた。

更に、塚本氏も言及していることだが、番組制作に携わってきた「大人」の情熱ということについても、再現演奏会の主催を通じて追体験することができた。25 分間の特集番組とはいえ、これだけのセットや出演者を準備し、舞台として作り上げていくことについては、子どもや教育に対しての強い情熱がなければできないことではない。そのような意味でも後藤田氏や志村氏等、当時の制作陣には心からの敬服を感じる。またその情熱は、現代の「みんなのうた」やその他の NHK 児童番組にも受け継がれているのであろう。

#### 出典

<sup>1</sup> 「NHK クロニクル」

<https://www.nhk.or.jp/archives/chronicle/?date=1962-11-03&channel=0>

<sup>2</sup> 「鹿児島女子短期大学 HP 『みんなのうた』 シンポジウム配信のご案内」

[http://www.jkajyo.ac.jp/information/info/post\\_714.html](http://www.jkajyo.ac.jp/information/info/post_714.html)

[A Study on NHK's "Minna-no-Uta Special (1962)": Educational Significance of Children's Programs Analyzed through Reproductions]

[SATO, Keiji・鹿児島女子短期大学専任講師・音楽教育研究、  
TSUKAMOTO, Eriko・ソプラノ歌手]